

# 木綿以前の事

柳田 國男



# 木綿以前の事



## 一

『七部集』の付合つけあいの中には、木綿の風情を句にしたものが三か処ある。それから木綿とは言つてないが、次の『炭俵』の一節もやはりそれだろうと私は思っている。

分よめにならるるしあわせ姫の仕合

利牛りぎゆう

はんなりと細工さいくに染る紅べにうこん

桃隣とうりん

鎧持やりちばかり戻る夕月

野坡

まことに艶麗な句柄である。近いうちに分家をするはずの二番息子のところへ、ういうい初々しい花嫁さんが来た。紅をぼかしたうこん染めの、あわせ袷か何かをきようは着ているというので、もう日数も経っているらしいから、これは不断着の新しい木綿着物であろう。次の付句つけくはこれを例の俳諧に変化させて、晴れたある日の入日のころに、月も出ていて空がまだ赤く、向こうから来る鑑と鑑持ちとが、その空を背景にくっきりと浮き出したような場面を描いて、「細工に染まる紅うこん」を受けてみたのである。またこれとは正まことに反対に、同じ恋の句でも寂しい

扱い方をしたものが、『比佐古』の亀の甲の章にはある。

薄曇る日はどんみりと霜をれて

乙州

鉢いひ習ふ声の出かぬる

珍碩

そめてうき木綿袴のねずみ色

里東

えりあまされて寒き明ぼの

探志

この一聯の前の二句は、初心の新発意しんぼちが冬の日ちに町に出で托鉢をするのに、まだ馴れないので「はちはち」の  
 声が思いきって出ない。何か仔細のありそうな、もとは  
 良家の青年らしく、せっかく染めた木綿の初袴を、色も  
 あろうに鼠色に染めたと、若い身空で仏門に入ったあじ

きなさを歎じていると、後の付句ではすぐにこれをあの時代の、歌比丘尼うたびくにの身すぎの哀れさに引き移したのである。木綿がわがくに行なわれはじめてから、もうだいぶの年月を経ているのだが、それでもまだ芭蕉翁の元禄の初めには、江戸の人までが木綿といえは、すぐにこのような優雅な境涯を、連想する習わしであったのである。

## 二

木綿がわれわれの生活に与えた影響が、毛糸のスエー



ターヤその一つ前のいわゆるメリンスなどよりも、はるかに偉大なものであったことはよく想像することができ。現代はもう衣類の変化が無限であつて、特に一つの品目に拘泥こうでいする必要もなく、次から次へ好みを移して行くのが普通であるが、単純なる昔の日本人は、木綿を用いぬとすれば麻布より他に、肌につけるものは持合わせていなかったのである。木綿の若い人たちに好ましかつた点は、新らたに流行してきてめずらしいというほかに、なお少なくとも二つはあつた。第一には肌ざわり、野山に働く男女にとっては、絹は物遠くかつあまりにも滑ら

かでややつめたい。柔かさと摩擦の快さは、むしろ木綿の方が優っていた。第二には色々の染めが容易なこと、これは今までは絹階級の特典かと思っていたのに、木綿もわれわれの好み次第に、どんな派手な色模様にでも染まった。そうしていよいよ棉種の第二回の輸入が、十分に普及の効を奏したとなると、作業はかえって麻よりもはるかに簡単で、わずかの変更をもつてこれを家々の手て機ばたで織出すことができた。そのために政府が欲すると否とに頓着なく、伊勢でも大和、河内でも、瀬戸内海の沿岸でも、ひろびろとした平地が棉田になり、棉の実の桃

が吹くころには、急に月夜が美しくなったような気がした。麻糸に關係ある二千年來のいろいろの家具が不用になつて、後にはその名前までが忘れられ、そうして村里には染屋が増加し、家々には縞帳と名づけて、競うてめずらしい縞柄の見本を集め、機にたずさわる人たちの趣味と技芸とが、わずかな間にいちじるしく進んできたのだが、しかもその縞木綿の発達する以前に、無地をいろいろに染めてよろこんで着た時代が、こうしてやや久しくつづいていたらしいのである。

色ばかりかこれを着る人の姿も、全体にいちじるしく変ったことと思われる。木綿の衣服が作り出す女たちの輪廓は、絹とも麻ともまたちがった特徴があつた。そのうえに<sup>あわせ</sup>袷あわせの重ね着が追いつ追いつとなくなつて、中綿がたっぷりと入れられるようになれば、また別様の肩腰の丸味ができてくる。全体に伸び縮みが自由になり、身のこなしが以前よりは明らかに外に現われた。ただ夏ばかりは単衣の糊を強くし、あるいは打盤で打ちならして、わ

ずかに昔の麻の着物の心持ちを遺<sup>のこ</sup>していたのだが、それもこのごろは次第におろそかになって行くようである。われわれの保守主義などは、言わばただ五、七十年前の趣味の模倣に過ぎなかつた。そんなことをしている間に、以前の麻のすくな突張った外線はことごとく消えてなくなり、いわゆる撫で肩と柳腰とが、今ではいたって普通のものになってしまったのである。それよりもさらに隠れた変動が、われわれの内側にも起っている。すなわち軽くふくよかなる衣料の快い圧迫は、常人の肌膚を多感にした。胸毛や背の毛の発育を不必要ならしめ、身と衣

類との親しみを大きくした。すなわちわれわれには裸形の不安が強くなった。一方には今まで眼で見るだけのものと思っていた紅や緑や紫が、天然から近よってきて各人の身に属するものとなった。心の動きはすぐに形にあらわれて、歌うても泣いても人は昔より一段と美しくなった。つまりは木綿の採用によって、生活の味わいが知らず知らずの間にこまやかになってきたことは、かつて荒<sup>あらたえ</sup>拷を<sup>あ</sup>着ていたわれわれにも、毛皮を被<sup>かぶ</sup>っていた西洋の人たちにも、一様であったのである。

ただし日本では今一つ、同じ変化を助け促した瀬戸物

というものの力があつた。白木の椀はひずみゆがみ、使いはじめた日からもうよごれていて、水で滌ぐのも気休めに過ぎなかつた。小家のわびしい物の香も、源をたどればこの木の御器ごきのなげきであつた。その中へ米ならば二合か三合ほどの価をもつて、白くして静かなる光ある物が入ってきた。前には宗教の領分に属していた真実の円相を、茶碗というものによつて朝夕手のうちに取つて見ることができたのである。これが平民の文化に貢献せずして止む道理はない。昔の貴人公子が佩玉の音を楽んだように、かちりと前歯に当る陶器の幽かな響には、鶴

や若松を画いた美しい塗盃の歡びも、忘れしむるものがあつた。それが貧しい煤すすけた家の奥までも、ほとんど何の代償もなしに、容易に配給せられる新たな幸福となつたのも時勢であつて、この点においては木綿のために麻布を見棄てたよりも、もつと無条件な利益をわれわれは得ている。しかもこれが何人の恩恵でもなかつたがゆえに、われわれはもうその嬉しさを記憶していない。偶然とはいいながらもこれほど確乎たる基礎のある今日の新文明を、あるいは提督ペルリが提げてでもきたもののように、考える人さえあつたのである。



## 四

木綿の威力の抵抗しがたかったことは、ある意味においては薩摩芋の恩沢とよく似ている。この諸なかりせば国内の食物は夙つとに尽きて、今のごとく人口の充ち溢れる前に、外へ出て生活のたつきを求めずにはいられなかつたろう。必要な農民を勇敢にし、海で死にあるいは海で栄える者が、今よりもはるかに多かつたはずである。しかし諸が来た以上は作って食い、食えば一旦は満腹して

これでも住めると思い、貧の辛抱がしやすくなつて、結局子孫の艱難を長引かせたとも見られるが、さればとて遠い未来の全体の幸不幸を勘定して、この目前に甘くかつ柔かなる食物の誘惑をしりぞけることは、人が神であつてもできないことである。木綿の幸福には、これほど大きな割引はなかつたが、仮にあつたとしてもなおわれわれはよろこんでこれに就いたであらう。それがまた個々別々の生存をもつ者の、いたつて自然なる選択である。久しい年月を隔てて後に、あるいは忍びがたい悪結果を見出したとしても、これによつて祖先の軽慮は責め

ることはできぬ。ただ彼らの経験によつて学び得る一事は、かようにいろいろの偶然に支配せらるる人間世界では、進歩の途が常に善に向つているものと、安心してはいられぬということである。万人の滔々として赴くところ、何物もさえぎり得ぬような力強い流行でも、木が成長し水が流れて下るように、すらすらと現われた国の變化でも、静かに考えてみると損もあり得もある。その損を気づかぬ故に後悔せず、悔いても詮がないからそつとしておく、その糸筋の長い端は、すなわち目前の現実であつて、やっぱり我々の身に纏まつわつて来る。どうして

もひとりの力では始末のできぬように、この世の中はなっているのである。

## 五

茶碗や皿小鉢が暗い台所に光を与え、清潔が白色であることを教えた功労は大きいが、それでも一方には、物の容易に碎けることを学ばしめた難はある。木綿の罪責に至ってはあるいはそれよりもいささか重かった。第一に彼はこの世の塵を多くしている。おかしいことには木

綿以前の日本人が、何かという人と人世の塵の苦しみを訴え、遁れて嬉しいという多くの歌を残しているのと反対に、そんな泣言はもう流行しなくなってから、かえって怖ろしく塵がわれわれを攻め出した。震災がこの大都をバラツクにした以前から、形ばかりの大通りはただ吹き通しの用を勤めるのみで、これを薬研やげんにして轍が土と馬糞とを粉に砕く。外の埃はこれのみでも十分であるのに、家の中ではさらに綿密に、隙間隙間を木綿の塵が占領し、掃き出せばやがてよその友たちと一緒に戻ってくる。雨水が洗い流して海川へ送るといっても、日々積るものの

幾分の一に過ぎぬであろう。いかに馴れてしまってもこれ  
れが身や心を累わづらわさぬはずはない。越前の西ノ谷は男  
たちは遠くの鉾山にいつてしまい、女は徒然つれづれのあまりに  
若い同士誘い合つて、大阪の紡績工場に出て働く習いで  
あつたが、もう十年も昔に自分が通つて見たころは、ほ  
とんと三戸に一人ぐらい、蒼ざめた娘が帰つてきてぶら  
ぶらしていた。塵は直接に害をせぬまでも、肺を弱らせ  
て病気にかかりやすくさせることは疑いがない。しかも  
山村から工場へというように、変化が急なればこそ心づ  
くが、こうしてただ居ては五百年千年の昔から、この世

は今のとおりに埃ほこりだらけであつたものと考えて、辛抱する者も多いことであろう。毛布やモスリンの新しい塵が加わっても、やはり昔どおりに畳を敷きつめて、その上で綿や襪はき襪ろぎれをばたばたとさせている。

## 六

しかし埃はもう今になんとか処分せずにはおられぬことになると思う。それよりも一層始末のわるいことは、熱の放散の障碍である。これは必ずしももう馴れてしま

つたとも言われぬのは、近いころまでも夏だけはなお麻を用い、木綿といつても多くは太物ふとものであり、織目も手織で締まらなかつたから、まだ外気との交通が容易であつたが、これから後はどうなつて行くであらうか。汗は元来乾いて涼しさを与えるために、出るようになしくみになつているものに相違ない。湿気の多い島国の暑中は、裸でいてすらも蒸発はむつかしいのに、目の細かい綾織などでびたりと体を包み、水分を含ませしておく風習などを、どうしてわれわれがまねる気になつたのであろうか。これから南の方へ追々と出て行くと、いずれの島でも日本



のような夏で、乾いた北歐の大陸に成長した人々は、たいていは閉口して働けなくなる。その間に在ってわれわればかり、以前ならばどうにか活潑な生活を続け得たものだが、今のようなあいの子の服装が癖になってしまつては、せっかく永い年月ゆかしがっていた常夏の国へ行きながら、とこしえの夏まけをしなければならぬ結果をみるかも知らぬ。

## 七

政府大臣が推奨する質実剛健の気風とかは、いかなる修養をもつて得らるるものか知らぬが、もしそれが条件なしに、木綿以前の日本人の生活に立ちかえることを意味するならば、その説は少なくともこの久しい歴史を忘れてゐる。東京の町などでは三十年余り前に、裸体はもとよりはだしまでも禁制した。しかもその当座は草鞋がなお用いられて、禁令は単に踏抜を予防するにすぎなかったが、もう今日ではことごとくゴム靴だ。そうでなけ

ればゴム底の足袋たびをはいている。足袋は全国に数十の工場が立って、年に何千万足を作って売っている。にえかえる水田の中に膝頭まで入って、田の草を取る足が段々に減少する。たまたま犬の一枚革を背に引かけて車を輓ひき、あるいは越後から来る薬売り娘のごとく、腰裳を高くかかげて都大路を闊歩する者があっても、これを前後左右から打ち眺めて、讚歎する者のないかぎりは、畢竟ひつぎようは過ぎ去った世のめずしい名残なごりというにとどまっている。次の時代の幸福なる新風潮のためには、やはり国民の心理に基いて、別に新しい考え方をしてみねばならぬ。

もつとわれわれに相応した生活の仕方が、まだ発見せられずに残っているように、思っている者は私たちばかりであろうか。





日本文学電子図書館

---

## 木綿以前の事

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：「現代日本思想大系29 柳田国男」  
筑摩書房

1965年 7月20日 初版第 1刷発行

1973年11月20日 初版第12刷発行

---

日本文学電子図書館